



TITLE:

# 日本に於ける金爲替本位制の濫觴 (下)

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

---

CITATION:

松岡, 孝兒. 日本に於ける金爲替本位制の濫觴(下). 經濟論叢 1935, 41(5): 709-721

ISSUE DATE:

1935-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130649>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第五號

昭和十年十一月一日發行

## 論叢

中小商工業者稅負擔の問題……………法學博士 神戸正雄  
利子生産力說について……………文學博士 高田保馬

## 時論

我が國に於ける地震保險……………經濟學博士 小島昌太郎  
商店法案について……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研究

中立貨幣の理論……………經濟學士 一谷藤一郎  
日本に於ける金爲替本位制の濫觴……………經濟學士 松岡孝兒  
萬民經濟學と國民經濟學……………經濟學士 白杉庄一郎

## 說苑

モールトンの運輸統制論……………法學士 吉川貫二  
所得稅に關する若干の問題……………經濟學士 柏井象雄

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

# 日本に於ける金爲替本位制の濫觴（下）

松岡孝兒

## 四、政府及日本銀行間の預け合勘定

ここに謂はゆる預け合勘定には英貨預け合勘定と金地預け合勘定との二つの形式がある。尤も二つとも金爲替本位制の運用と關係あるのではないが、其の第一は日本がイギリス（大部分の場合、一部分の場合はベルリン其他で）に於いて所有する英貨磅をそのまま日本銀行に預け入れ、日本銀行は之を保管し、之をば發行準備として日本内地に於いて日本銀行兌換券を發行し、之を以つて政府に對する貸付を行ふべく計畫されたものである。これは明治二十八年この問題に關する案が閣議に提出された場合の計畫である。この場合イギリスに於いて之を保管する日本銀行は言ふまでもなくその代理店たる横濱正金銀行ロンドン支店である。即ち政府が明治二十八年十一月「臨時軍事費及陸海軍擴張費會計整理の件」<sup>16)</sup>に於いて「支那より拂入れたる賠償金の英貨は陸海軍擴張費中外國購入品代價支拂のため及鐵道其他材料等外國品購入に供するためなるべく外國に於て保存し」「右英貨を日本銀行へ預け入るるの手續をなし、之に對して兌換券を發行せしめ、國庫に借入れ内地諸般の支拂に當てること、但しその預け入利子は凡そ年二分、借入利子は凡そ年三分のこと」

と規定したことは正にこの政府及日本銀行間の預け合勘定設定の事情を語るものである。<sup>17)</sup>〔註〕

〔註〕 此の預け合勘定のため預け入れた英貨が日本銀行代理店に於いて如何に保護されたかといふ點については次のごとき記載がある。即ち英貨を寄託預金事務取扱順序第九條によつて預け入れるときは（寄託の意味ではない）寄託金の中より受領した英貨、通貨、準備價格、利子等の割合を記した領收書を金庫出納役に差出し、その受取りたる英貨は英蘭銀行に寄託すべきことを命令し、同時にこの旨を在ロンドン管理官に通知するときは同管理官はこの通知により兌換準備にあてる英貨はこれを日本銀行より英蘭銀行へ普通預け入の方法により保管されるものである。尤もこの普通預け入方法の外に特別保護預け入のごとき特別保管法があるが、此の方法は英蘭銀行當局者の言によれば英貨を金櫃に納め閉鎖若しくは封印のまま預け入れるものであつて、その櫃中の金員は英蘭銀行の通知せざるところであり、同行は單にその金櫃と封印との安全を保護するに止るから、破産等の場合を除く外は特別保護預け入も普通預け入もその確實性は何等異なることなしと云つてゐる。しかも亦この預け入をなす金櫃は預け入人の支辨に屬し、出納は勿論其他繁雜な手續を要するといふ點から結局日本銀行のとれる保管形式は普通預け入金とせるものごとくである。

然るに其の第二は政府が倫敦購入の金地金を日本内地に齎しこれによつて行はれた預け合形式である。この形式の成立は日本銀行に與へた預け合に關する命令書に於ける對象が「英貨又は金塊を以て」と規定されて居る點より當然である。<sup>18)</sup>この形式が行はれたのは惟ふに在外正貨を日本に將來し、之によつて直ちに兌換券を發行せんとせることに基くものであらうか。即ち政府が金貨本位制の文字に捕はれ金貨に改鑄せばこの改鑄期間通貨發行に不便を生ずると見たためではなからうか。尤もこの形式が金爲替本位制の原則を離れるものであることは斷るまでもない。

此の勘定に於いて政府が英貨又は金貨を以つて日本銀行に預け入れ得る金額は凡そ八千萬圓を限りとし、必要に應じ逐次預け入れるとされてゐるのであるが、明治二十九年五月二十日の始め

17) 上掲書第二卷、p. 574

18) 此の二つの形式が如何に運用されたかについては、第一形式については明治財政史第二卷、pp. 578—587 第二形式については同卷同書 pp. 582—583 参照



日本に於ける金爲替本位制の濫觴

第四十一卷 七一二 第五號 一一四

三月	四月	五月
三六、四〇九、〇四七	三三、七八六、九五五	二六、九八七、六九四
明治三十年より三十一年に至る制限外發行月高末現在		
三十一年七月二十四日	三十一年二月	三十一年三月
四五、三〇六	三〇、六二六、五五五	三九、六六六、三三三
一〇、三三五、一九五	三月	三九、六六六、三三三
一四、一九七、三三三	四月	三九、六六六、三三三
三、七三二、〇三三	五月	三九、六六六、三三三
二九、一九九、六三三	六月	三九、六六六、三三三
三、一四二、二四八	七月	三九、六六六、三三三
四七、三三三、六五七	八月	三九、六六六、三三三
三九、五五九、四八八	九月	三九、六六六、三三三
三十一一年一月	十月	三九、六六六、三三三
	十一月	三九、六六六、三三三
	十二月	三九、六六六、三三三
	三十一年一月	三九、六六六、三三三

第三表 明治二十八年以降三十年六月に至る兌換券増加(單位圓)<sup>20)</sup>

正貨準備	保證準備	兌換券發行高
二十八三年三月	七三、三六七、八八八	六二、八五六、七六六
六月	六四、八八五、一四九	七八、一九八、五二四
九月	六八、一五〇、二一九	八五、六四七、六六四
十二月	六〇、三七〇、七九七	一九、九六六、〇一八
二十九三年三月	五五、四七〇、〇〇〇	一〇一、七四八、八七
六月	一〇七、一八一、〇九	六四、五三三、八〇〇
九月	一一〇、三六六、〇五四	六六、三九三、三〇五
		一七六、六〇五、五五九

するとところである。ここに於いて明治二十九年末以後倫敦購入の金地金が次第に到着するに及んでこれまでの第一形式の在外正貨を以つてする預け合勘定に代ふるに第二形式の金地金を以つてする預け合勘定をなすに至り、しかも之を無利子とした。從來預け合勘定に於いて利子を附し政府の預け入と日本銀行よりの借入との間に一分の差を設け之を日本銀行に與へた所以は、之を以つて兌換券の製造費並に發行手数料に當てたものであるが、實際この金額は明治二十九年五月以降に支拂へる金額がかくのごとき費用を償つて尙ほ餘りあることが示されるに至つたので、

十二月	三三、七〇〇、一九三	六五、五八三、七〇四	一九、三三、八六六
三十一年三月	二〇九、四八八、〇七五	七二、六二四、二五三	一八、一二二、八六〇
六月	一一九、三三三、〇六四	七五、八六六、六〇五	一五、三〇二、六六九

遂に三十一年一月一日より預け合相互  
間何れも之を無利子とするに至つた  
ものである。<sup>21)</sup>

要するにこの第一形式の預け合勘定の本来的形式は償金の日本取寄が短期間に於いて困難であ  
ると考へられたことから起つたものであるが、此點は當時最も強調されたところのものごとく、  
議會に於いても政府委員は次の如く説明してゐたのである。

まづ松尾政府委員は次のごとく謂ふ。<sup>22)</sup>

「銀貨で取寄せることもあり、爲替で取寄せることもあり、種々にやらなければ爲替の一方のみを以つて取寄せることに  
は参りませぬ。日本からの爲替といふものは結局年々一千萬圓よりは爲替で取寄せることは出来ませぬ」。

更に田尻政府委員の説明は左のごとくである。<sup>23)</sup>

「之は大分入込んで居ります。此八千萬圓といふ金貨をばコチラへ取寄せるといふことは到底出来ない。之を若し又銀にして  
取寄せるとしても、銀貨爲替で倫敦で買へば銀價が高くなる。今金で持つて参りますれば金のパウンドの數を澤山に出さな  
ければならぬと國家がそれだけ損をする。それで銀を取寄せるにしても徐々として爲替相場に響かぬやうにしなければなり  
ませぬ。そうするには倫敦でも大抵銀行で十萬磅の銀を買ひますと直ぐ銀が騰ります。桑港では五萬弗でこたへる、紐育で  
は十萬弗でこたへるといふ景況でございますから、金を持つてゐて銀爲替を送るといふことも巨額のものをやると倫敦に持  
つてゐます金といふものを澤山使はなければならぬからして、其方が利子を拂ふよりは損になつて来る。それでさういふこ  
とをしますならば、今日巨額のものが一時にコチラへ這入りますからして日本銀行へ預け合をして日本銀行へ一分の差をや  
つて日本銀行と政府と利子を互に拂ふ。先づ日本銀行預け金に對しては二分の利を拂はせて預つてゐる政府の借てゐる兌換  
券には矢張り政府より利子を拂ふことにし、さうして大抵此方へ金の這入りましたのを日本銀行の倉庫に入れましてさうして日  
本銀行はそれを兌換券の基礎とするを許すやうに償金特別會計法になつて居ります。向ふからして八千萬圓といふ高をば一

21) 上掲書 p. 572—573  
22) 田尻前掲書 p. 313  
23) 田尻前掲書 p. 313

年度中に取寄せると銀が高くなるといふ所よりして遂に政府が利子を拂ふより損をせねばならぬといふことを慮りまして苦しい計畫をしたのである。丁度二分日本銀行が拂ひまして、詰り一分手数料をやる。詰り兌換券は悉く金を土臺にして發行することは出来ぬから、勿論半々位は宜しいでございませうが、色々計畫の末さういふ込み入つた議案が出たので出来ることならば爲替相場を容易に狂はせずに償金を用立て、日本經濟を狂はせずに済むであらうと云ふことで出ました。それは法律案の方で委しく御話を致しませう。」

併しながらかくのごとく、倫敦にある償金を以つて直ちに正貨準備の一部と看做すことについては勿論異論なき能はざるところであつた。此等反對論者の主張するところを綜合するとその理由は次の三つに歸する。その第一は外國にある貨幣が我國に到着するには數ヶ月の日子を要するから、上述せるごとき發行形式は一の保證準備による發行形式であつて正貨準備による發行形式ではないといふことであり、其の第二は中央銀行に於いて兌換に宛てらるべき正貨準備は日本にある正貨でなければならぬ。正貨準備の所在に關しては何等規定するところがないといつて之を辯護することは兌換準備の意味を正當に理解せるものではないとせる點であり、更に其の第三は在外正貨を以つて保證準備とし之による制限外發行を行ひ以つて在外正貨を順次取寄せることは我國兌換銀行券條例に何等反するものでないのに拘らず、在外正貨を以つて直ちに兌換準備とするがごときは、自ら兌換銀行券條例を破壊するものであるといふにある。かくのごとき見方は勿論國內通貨といふ立場から見れば政府の兌換處置に絶對的な確實性を見出すことはできないかも知れないが、併し國際信用通貨といふ立場から見れば一の進歩的方法によつたものといふこと



ができやう。

或はまたこの在外正貨準備の方法によつて無利子預け金をするよりも之を日本に將來して利殖するの勝れることを説く見方もあつた。<sup>24)</sup>併し在外正貨のすべてが必ずしも無利子預金ではなかつたのであつて、一定の利殖の對象となつたものもある。従つてこの批判は必ずしも當れりとするを得ない。

併し當時金爲替本位制は決して積極的に運用されたものではなく「當時の狀勢上已むを得ざるもの」と見做されてゐた。従つて「久しく之を有するは決して經濟上良策に非ず」とした。蓋し上述せる如くこの在外正貨準備發行は制限外發行に代れるものであるが、制限外發行は金融界の異常即ち資金需要が如何に平常の程度を超過してゐるかを推測せしめるものであるのに今制限外發行に對し金爲替準備を以つてすれば資金需要程度の判定困難となると考へられたからである。従つて日本銀行も明治三十年三四月頃より徐々に政府預金を返還し保證準備發行の兌換券と振替へるに至り、明治三十年五月十日までに英貨預け合は半分は金地金預け合とし、銀塊並に爲替取組代金として返還し、ここに英貨預け合勘定は一段落を告げるに至つた。<sup>25)</sup>これこの當時に於ける日本經濟の國際信用的實力が如何に低いものであつたかを反映せるものである。

## 五 日本銀行への利附預け入勘定

24) 上掲書 p. 320

25) 明治財政史第二卷 p. 573

已に述べたるがごとく償金特別會計に於ける金爲替準備形式による日本銀行の兌換券發行形式の**一は、政府と日本銀行との預け合勘定によつて運用されたが、併し又在外正貨による金爲替本位制の運用は單に上述せる預け合勘定形式によつてのみ行はれたものではない。金融市場の資金需要に對し資金供給不充分なる場合に際しては政府は適時日本銀行に在外正貨の利附預け入をなし、日本銀行はこの在外正貨を準備として銀行券を發行した。<sup>26)</sup>尤も利附預け入勘定自體について云へば必ずしもこの市場資金とのみ結合せるものではなく、むしろ多くの場合爲替資金に關係したものであることは注意すべきであるが。**

此の事情の發生は明治二十九年末に於いて日本銀行が金融市場の情勢に基き明治三十年一月十日まで一千萬圓の資金融通を國庫に申出でたることに起因してゐる。併し實際國庫は當時その申出に應ずる餘裕なく、ここに於いて明治二十九年十二月二十八日より明治三十年一月十日まで政府は日本銀行に對して年三分の利子を以つて謂はゆる定期預け金を試み之によつて當面の急を救ふこととしたのである。換言すれば政府所有の英貨を以つて日本銀行定期預け金とし、之をば銀行券發行準備とし、<sup>27)</sup>造出資金は之を市場資金として貸付けたものであつて、これ亦一の金爲替本位制の運用形式である。この預け入英貨は上述期間明治三十年一月十日を以つて整理されたが、その前者と異なる主點は前者の政府貸付資金たるに對して後者の民間貸付資金たるに存する。

更に明治三十一年後恐慌起るに及び政府は遂に此の救済に出動しその資金をば在外正貨の政府

26) 明治財政史第二卷 p. 584以下  
27) 明治財政史第二卷 pp. 584—585參照

利附預け入によつて運用した。是れ當時全く内地金融市場が逼迫し、しかも帝國議會の解散等に基づく事情より豫定の公債を市場に求むることができず、一般財政計畫の遂行上已むを得ずして公債支辨の費途に對し一時償金繰替支出の必要生じ議會の協賛を得たることによる。これがため明治三十二年十二月までに繰替支出された金額は實に四千二百萬圓に達した。この金額は後四分利英貨公債中より通貨及英貨磅にて返還され、英貨磅二百五十萬磅中二百十萬磅は日本銀行に通知預金とされ殘額は英蘭銀行に寄託された。<sup>28)</sup>

此の方法によれば日本銀行は政府寄託金中より當該英貨磅金額を受取り、之を別途勘定として英蘭銀行に寄託し以つて兌換券發行準備に宛てるものである。それは兌換準備金のイママアクであり預け合勘定とは貸付を行ふ方面の相違はあるにしても、又貸借關係も双方的なると一方的なるとの相違はあるにしても、その金爲替本位制運用の條件を充してゐることについては何等前者と異なるところがない。

此の利附預け入勘定形式は右金爲替本位制形式による運用の外に或は日本銀行を通ずる爲替資金又は爲替基金の調達等にも使用されたのであるがここでは立ち入らない。要するにそれらはすべて民間資金供給に向けられたものである。この形式は直接兌換券發行形式として現はれなかつたが、償金の内地取寄の點から云へば寧ろ最も大なる役割を果したものであらう。<sup>29)</sup> 日本銀行が政府銀行より次第に民間銀行中の銀行となりつつある今日に於いてはともかく、明治中期に於いて

28) 明治財政史第二卷 pp. 598  
29) 明治財政史第二卷 pp. 602—608

日本銀行が政府銀行たるの色彩が比較的濃厚であり、金本位制は政府が計畫し實施せんとせるものなるに於いて、金爲替本位制による兌換券發行がこの民間貸付よりかの政府貸付に重點を置いたことは蓋し其の當然とするところであらう。

## 六、結 言

以上之を要するに、私は明治中期に於いて日本が日清戦争賠償金を利用して金本位制を採用せんとして金本位制の一形式たる金爲替本位制を採用せるの事實を説明し、更に又その事實は如何なる形式を以つて行はれたかを明かにした。つまり日本の金爲替本位制の濫觴は日本が銀本位制より金本位制に移らんとするその過程に於いて發行準備を在外政府資金たる償金受取英貨を以つて賄つた事實に基因するものである。

これがため日本銀行は倫敦に於ける代理店即ち横濱正金銀行支店と連絡し、政府が倫敦に於いて受取れる償金の一部を日本銀行との間に或は預け合勘定に於いて、又或は預け入勘定に於いて日本銀行をして運用せしめたものである。即ち預け合勘定に於いては原則的には政府が倫敦に貯藏せる英貨をそのまま日本銀行に預け入れたるものを以つて準備とし日本に於いて兌換券を發行し以つて之を政府に貸付けたものである。更に預け入勘定に於いては一定期間一定利率を以つて一定金額の倫敦保有英貨を日本銀行に寄託し、同行は之を英蘭銀行に預け入れ之をば發行準備と

して日本に於いて兌換券を發行し、之を貸付けたものである。併しこの預け合又は預け入に於ける政府所有の英貨償金はその期間の到來に於いて何れも之を償還して居り、日本銀行は金本位制樹立の過程に於いて金爲替本位制形式によつて政府所有英貨を在外正貨として運用し、之を兌換準備とせるものである。此の意味に於いて明治二十七八年戦役賠償金が日本金本位制の樹立に著しい役割を果してゐると云ふことができる。尤もこの在外正貨たる償金の價值は金爲替としての運用による金爲替本位制確立への寄與の外に一圓銀貨引換による金貨準備構成に於ける役割も亦無視し得ない。<sup>30)</sup>

此種の在外正貨の運用即ち金爲替本位制形式の採用は一方その通貨膨脹を通じて戦後の恐慌を將來せしめたが、他方更に之により戦後の金融恐慌安定手段にまで利用されたことは注目すべき點であらう。自らその起因をつくり自らその安定をはかつたといふことから見れば一見問題はないやうであるが、前後數年間に亘つて日本經濟を浮動的状态に置いたといふことについては考ふべき問題を残したわけである。

最後に一言したいことは己に述べたるがごとく金爲替本位制の成立及び運用には原則としてその採用國の對外バランスの優位又は均衡が必要であるといはれてゐることである。<sup>31)</sup>併し日本が日清戦役後當分運用せる金爲替本位制はかくのごとき本來的金爲替本位制の特性に基けるものではなく、金本位制中の金貨本位制を樹立せんとするの過程に於いて償金を利用せるものに過ぎない。

30) 明治財政史第十一卷 p. 913以下

31) Icard: Gold Exchange Standard, pp. 161-162.

或は銀價格下落の影響を避け又は金利の追及を求めた點に於いて當時東洋又は歐米に行はれた金爲替本位制の要求せる一般條件と必ずしも乖離してゐるとは思はれないが、併し日本の當時に於ける對外バランスが日本産業發展の基礎建設時代であつたことから、むしろ連年入超を示してゐたことよりして、上述せる金爲替本位制成立の根本たる償金の利用は一般東洋諸國に於ける金爲替本位制に對しては一の例外であるとも考へられる。

尙はこの期間に於いて注意すべきことは、日本は當時朝鮮、臺灣の經濟を支配するに至つたのであるが、朝鮮に於いて金爲替本位制運用の基礎が据えられたにも拘らず臺灣に於いては遂にそのことがなかつたといふことである。<sup>32)</sup> 即ち日本經濟力の發展が朝鮮に向つたとき、それは朝鮮の貨幣制を金爲替本位制に決定しながら——これについては別の機會に述べる——それが臺灣に向けられたとき何が故に金爲替本位制を生ぜしめなかつたかといふことである。此點についての私見の支配的重點は、その經濟力浸潤過程の相違にあるとするものである。<sup>33)</sup> 即ち朝鮮及び臺灣は日本勢力侵潤前その貨幣制は共に紊亂してゐたのであるが、此の兩者の對日貿易決濟關係には著しい相違があり、朝鮮に於いては日本の諸銀行は早くからここに活動し、日本通貨はまた早くからその海關稅支拂手段として流通してゐたことなどの特種的經濟關係が自らこの問題の決定に支配的な影響を與へたものと解することができ、之に對して臺灣に於いてこのことなきはそこでこの貨幣制度は單純に之を本國と同一主義によらしめんとしたためであらう。

32) 臺灣銀行に於ける發券制度に於いては日本銀行券は之を保證準備に用ひられるがごとく規定されてゐる。  
33) 朝鮮銀行：鮮滿十年經濟史；臺灣銀行：臺灣銀行二十五年史參照

本來日本の對外經濟に謂はゆる北方政策と南方政策とがあることは周知の通りである。此の兩者中今日までのところでは北方政策が極めて實質的に展開しつつあるに對し、南方政策は比較的に謂つて其の實質的效果が低いといふ感を催さしめることは、如何なる原因によるものであらうか。このことは日本經濟の發展に就いて忽にすべからざる問題である。そして私はこの點について朝鮮銀行が金爲替本位制の運用によつて極めて彈力性を有する發展をなし得るに對し、臺灣銀行に於いては金爲替本位制が行はれざることが實質的展開に充分な結果を齎し得ないのではないかと考へる。日本圓銀が南方諸地區に進出せることは已に業に古きことである。然るに今日其の後が續かない。それで上述せることがかゝる結果を惹起せる所以のものでないかといふことをひそかに疑はざるを得ない。

要するに日本金本位制樹立の見地から見て、日本が外資によるを避け償金によつて之を設定し銳意日本經濟力の發展を圖りその展開速度の迅速かよく萌芽期に於ける日本資本主義をして貸付國資本支配の機會を免れしめ、金本位制樹立の目的を達せしめ得たことは、正にその一大特性であるといふべきである。此點は日本經濟の最近第十九世紀末より第二十世紀始に亘る發展を研究するものにとつては恐らく否定し得ない特質であらう。